葛之松原　全

へ 5
1815

葛の松原

冬の雪のきえんするをききる人もあるかしや
秋の月のきぬをきんとにはあらねど細にわたるるも
あかく花さきれをうかみ詞をふむ道の了意をさしのび
さるすをかれむその南とひぬうく物ではさ深の源ち
うし世の風雅に志をよする人も万か一もあらへうき
是故に支考が随步をさ深して東の人は記念
にはなるへ侍る

芭蕉庵の叟一日啼焉として曰く風雅の世に行は

芭蕉庵なとへい侍るは風に吟めるとし一回と皇狗と
なり一回ハ白衣と独くたゝとして侍りける所をしら次か
あるハ中間乃一現をへしとて春を武江の北に閉
給へハ雨静にして鳩の声ふかく風やはらかにして
花の落る事おそし弥生も名残おしき比にや
ありけん蛙の水に落る音しハしハならねハ言外の
風情この筋にうかひて蛙飛こむ水のおとゝいへる
七五ハ得給へりけり晋子か傍に侍りて山吹といふ
五文字をかふむらしめんかとおよつけ侍るに唯
古池とハさたまりぬしはらく論之山吹といふ

五文字ハ風流にしてはなやかなれと古池といふ五文
字ハ質素にして実也実ハ古今の貫道なれハ
ならしされと花実の二ツハその時のある所なりし
柳ハ人丸のひとりかも寝んと詠れ奇ハかたかりけりて
やゝありて後に定家卿もこの筋にあそひのかれしと
少侍しと志る山吹のうきをも文字を捨て唯古池と
なりつる心にて浅から猶何法師ハ風月の情にうとまり
うき兼好法師のいさめ給へるとや微妙殊勝の
事く
抑風雅ハ何のためにするといふすゝや孔子ハ之を下篇ハ

艸木禽獣のいふかしき趣をあらはしめ侍るは三十一字を
はなれて上下の情にあつかるしも其詩句にもとらしめ
艸木禽獣の名をさして高下の形容を発するは
その風雅を知るへし志の深に俳諧といふ文字は史記に
其根の枯論といへりけれは諧詐は昔より次第廿比之名
をとりあるへん事を阿叟子や侍りて古今集に世に
俳諧の名をたてり今の者是をやん事なくへるまゝ是
世に韓子の竜麻も魯論に志ける花厳の大瑠璃
もその奥に志深しあり俳諧に世の変相にしく
風雅は志の行所なと昔ともわかる是なるらんや

いかゝへの俳諧は如来禅ならく其理一貫して錦の
ましくその風雅は祖師禅のましく捺着すれは即転す
わかるはしも理智ありわくる称を寸心に知るといへまし
たくひなへし俳諧よ古人の知るといふ事をたて深居の
叟は(よ)にかなうまきやまれしらの
世の風雅に於ける者も月花をまくいひて思ひしとは思ふ
めくふふしの郷の我中になつくこしの二めしも
めしやまらんあふらひも知るに仕う称なくるいめしまや
まらんと七文字にて奇に放付して笑しら老杜か
呼児向煮魚ともいへり古人の語意を用ゆ筆一字

此言もなほきをわろきいふにあらしうきとて辞はやく
姿もくるしくいひ出るゝんは要なき子に称せ
られ爾く辯利ならのことくいふ類へし
晋子も後拠といふ名のいひ翔しもて手ヽに心を
くるはれたるにやあれし集に示さるといふ意の論は微
細の示かく心をもしめさむ計勝の事しいてくるや
まし　晋子か論術あ例も酒盃を厭きるといふ人
あるに宋ノ伯宅編には白氏か二千八百言飲酒の詩
九百首ありと答へ侍ると云也　晋子か性人に勝まれ
猿は楽天か飲酒を私わきまりありとて用の事

わつゝ後き侍りな
風雅は所よりとつはるものなれ名家は一よ
取をみて始終の変化をかつてうすけるはありうす
其句を味ふしかといふあれも一ま取を清らかなる
あふりちに一句は上をも論一といいは両とかし一とい
のしかして中品の眼をもしんすをある原精変
換変化わくのし　詩か情実の中にいるとも
古の此一般の名人あるは飲しまき詞を好と計爲　秘
訣は議を採りしといひ出すまに志をなるのはかるあ
となる田舎人の卒塾婆を持す後世のとし

なき人の羅縛〓物なれど其理はあしからぬにやと心ある人
うれしとぞいふ唐李之藩は夜深枕に觸蟲一之句
をきく〓〓判り侍りしとかや
いかなる事にも心をとゞめぬはあやまりなり故
半にして火を消し隣も〓〓まゐりけると尚桂いひて
居る時その〓〓眼をふさぎぬるや閉ぬるやといふを
きゝてそゞろにおかしう覚ゆるなる〓と心ときめきなど
春草秋鳥の名字をも記しおく人に〓〓へ訓蒙
圖彙にて見知りたらんはいさゝか覚束なしかなれ
ど〓〓つまらぬ物をいと珍しく〓〓〓と〓〓〓〓

作られしとかや
いづれの年の夏なりけん三五月はふく風すゞしく暑さ
うすきといふ句を人の語りけるを聞きけんは源氏の巻くに
心をとゞめたるにはあらでや山路に菫といへる句なれ
しをある人〓つらねて頭なりと有〓〓の
すゞしの〓山路も〓〓きの情やすきれといへる〓
和華にして見るにぞ人の心そ哭来なかれ
半面〓くの総ても〓〓まくに酒飲馬上には眠
行〓らんいとあさまし
一とせの秋嵐の〓〓〓葉をのむ〓〓と思へ〓〓

其うちに湖南の拾須はいひたきくらんと文して問侍るに
花の葉あらざる価をとて春色なれと答られたれば我ら
さあれども骨は得ぬると阿叟もかくされけり
支考か東行の此風雅はいかにと侍らんと問人あれば
先は寛之を明しまでいふべきくはしくはいはま
人々の此又此口癖にて其寂莫をやきれる
ましと平春よきのさまいふと口おし

鎌倉を生て出けん初かつほ

かりあるにおくるゝ秋や瀬田の橋

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

詩歌に名所を用る事たやすからし鎌倉の初鰹は支考か
東より帰りて侍る事ありしそてらんせりされしを生て
出るといふは鎌倉の文字の文字の外に色くるを所て
中あれそられしく少待るとて阿叟もにくからされしか
さらわりと微幸にいひ明しぬれんはらくおのれは生死の
さかひ地にて出入せんに鎌倉は此あたりの外に外よ色なき
まつらく風雅に於ふ人も生て鎌倉を出し鰹の此歳は
の春も盛に旅なるとも世乃秋桐にのゝ眼をとてもあるも
けるそうまも限る色うす七月盆の増て海さあるとて
いろの巻をとゝけらしたゞ七湖あり侍るは一二ま色つくるを

さる夫勢田といへるものは古今に模擬をもなす道し
むかしより文章には結未生はの詞といへるすくなからず今これ
若きのこゝろゆるものあらんか天心を家にあやかまれん
とふらひあつ称を向とつ係の法あるもあるかくのごとしさるを
未詳の人ゟ始ゟ深ゟもしめしくして早ゟ一遊の行らし
坊ゑ手ぬは一生を家ふあやまらされしや

角ゑ手や伊勢の何の花ざかり　其角

何事にも始て結未生はの詞を用ひ晋子始ていのまゝ
風流とさも古今俳諧の海くゆるあらんとよまんも
ゆきされ侍りし

蛛枝に蓑は浮きしかゝるあり　同

定家の蓑の浮橋はしあつて久しく絶あれをも
晋子も自覚の中浮るが加の人のいふ事も尽し品格をも
あるまて天縦の風骨容相の外に志をゆかりまると左右は
趣きとくて世人の口志ゟ先なでゝるまは芭蕉庵の奥の手も
とよまんも結ばれしその夜の心触にかへし

稚の葉や樒にかけ結ふ玉あらり　珠頂

浮舟に清暁の蓑の一幅へ　支考

蓑くゝれて泣く涙の袖にきえ亡の蛟若蛛枝のたぐひきまき
おもかそ千載の荘子をとよみといふらあらん趣向と

古まゐりもと附所新しく句作りもつくしくさすれハ今
不変の正風といひつへしまことに此あとをいふ俳
あるかゆへ人の心を付て書を好めれともいかなるかた
よりか俳諧をまなふへきあかれをきわめり毎句清しき名月
を好むもの中にも好むに似たるは何とかくいふ生する句ならは
とある所にたのしさにおもむき風情のありさまのいふし
俳諧は傍にいやしき言葉にもあれとも句に必めかしきを
よき家をおしなへて公道のはなれたるはをとり
世中を知しは御存しいふ名乃いふ俳諧しきや
なにとしのありとの葉の世に知る石菖とせしと

俳諧を専とし侍るかいさしきのたのしみにあらんか
月花を詠しては春秋の季候猶その季を先とし
一去りせは新しき趣向なるへし只平生の心を第一
俳諧にくさへするかよしと之曲水蔵皿の屛之とは此句
勢よ花の性格のすさ見振りてといふは蓄か残より発
向起りて花をは世間次第にあらしき数些木の風と
云つくるも家を開くに添へし

三味線や芳野の山を此月雨　曲水

此句は人の志ある也きを風情なる口にうつしの事のことあらん
いと面白きにかしらはなりては面影を思へは雨見はあらく柿森

うちなる圃の中に東坡か九桐壮常にも栽させんそ
ありけの錦に添ふへし発句になりまことなる
ましきを風する第一の工夫なるへし
わか詩の杯も花より勝れて
比る錦をまさて放るりへけるし好悪をもてこそあり
めならめ多く起清綺合の如格をおるへし第二これ
は流りて何為に文字の意をあらはすをもつて俳諧
一生を送し硯の桐の中にかきあらはして風雅の
罪人なりん比句花の字なきは法をさらす洛乃和尚
法師に案しやとこ添かな文字ありて一生とあやまられ

りきて花とうち下湖南の佛をさらせ茶の秋なりんをさしを
見はうまくしもたりをきは俳法師のつふはかなき
とうや世の風雅に法まして教りて流水花苍の情
みそいつまて湖南の仏をと法をせん花り御の思ひ
かもいてとありき教りぬり上人のさうふと
なる添ふの中柳をよふる句にて佛いさうなるか

風来寺

夜寒さゑに朝祈り星ありて旅寝かな
叶かて宿かあくや中空の花
かゝる者も海へて昔もありしとおもひさかるか

たきまじきやからんの葛州
学者臑子蕃書な　榛乃先
彼僧の和尚ともすゞしと嗟くあらぬることいふべし
思しき人の数々
杜国とつましのおのとあるよし阿里の是目笑なきれ
みてあまる世なりけし詩文にはそれぞれの文字を
用の風雅なる人の詞をぬすむあはの多からひを難
ずし
集なとはそのつゞりのまゝを用ゐしいくらともまた
切まかせるならぬ　くもる爲たゝれくるしかるべし

あたかも文集には古人の学のさるよまの形容
あまく作りなしは笑しく荘子の言わその広ゐし
流るゝ也せり
詞を借く又は恩ましくせんとする人は精をとめて
云客人を落ちくといふ其風流あきらかにも
畢て合類節用をみる幺名とやめ林下何曽見一
人といふ侍て何篇の二字あるをとくし許せり故に
老杜の秋興の侍ある野航恰受両三人といひ何篇
此あつさる恰受乃不思儀なる詩とも得
さる風雅あり張籍の賈島にあつる侍に一二三此

風情遠ゝ和哥とつゞ禄けめて馬蹄宿去入俳
家といふ麿まゝといふて今し侍らんされた文ゝ
とほしわかぬもの
此の字はやしき詞あるとし鐵の常蔑しく眼と
めて古き小判の出る古屋家といへる類ひあ俗乃
俳を所望しくゑるとや侍りき
ての字獨アて用る事は哥とはあまり侍らく
外の詞離なれたさのとゑくるしかゞてさの此へての
あのゆかんやうに世よいそれなく云詞は本体と多みて
ら中心派まうされだくゑとなや侍しらは勝を仮て

侍りぬ猿だのありし晋子か宿札にかゝつけし
さるに札地はいふ冴は下の文字をと候さつあゝう
阿世めて侍をよやされ侍りしか
出替りといふ詞に養父入とはあとりてこやしにを
出かはりや幼ごゝろに物あはれ　嵐雪
嵐雪か幼の一字あらん人ゝ難りの便とゆつりゐると
あらくだ馬上の襲響を絵にかきぬるに甲の兄入来斗
あらんに類の指よりいつかふ茶髪のよとゑとおそれい
やうて二八の義か年といへるも物とし思ひますあり
しらひあり

酒のあいさつに稀也　夜の雪

一句の姿たしかならねハ趣向の新きすをと口先と
味ありしかるにとも晋子か肇き僻か大切のるかと
ありへし庵中に禅を起こるといへる句ハ声にとゝめく
さるか面白しとてうせ野田の家康にもあらハるまゝ
大力の男のかきとへよ長柄に銀ぬきさしけさとまくらき
とらぬて銀の二字は我と赤き将独へし

情嫉の母きし淡かにき落かな　大坂 東庸

斑をの帝宇治の果木の香かな　同 昌房

何かくるとも見えつれかくも秋の風と無念桐の月　介

出かけこそ是の薫猶独へ意外の銅蒼のいつらか
かれぬ形容をあらしその地をさゝす

跡葉に咲ぬあらいし海鼠哉　その 如行

如行ハよりしなおのこと事は我の奥の深くもらし
世外なるひと見給ん

棋ともひいつの深掛ハおくるけ　枳風

棋ともきや行を知つて拝られ　友房

同じ年の暮れなん　諸の雲水を留めて俊秀の
面拝ハありけあるて志のわか季に進みて等連に
若しころ厭をあまわらしすとあるをうんをけなよ

きこえ雑和なるべし
　帷子を洗ふてほすやる　若狭ぐさ　正秀
正秀が性はあくしれ深く微細の風情にあふれて
曽良が大和路の飯酒をとるあそかくはおくるや
されしとかや　猪に吹るゝされしとのしぼしと云
何がし肌身はなさず添へる人のいふる風情なるを
薪となりて朽ぬる葉山子やこそ添は風雅の
用なきあまりずと阿波ひらかぬつまやされし
べし
　立舞ふ薄は何になれとや　秋の風　路通

一生の風雅を此中にこもりてとかくはかされけん一生世の
雲に根去のいそしとらず華を結ひける卯のさ
此下に行くを覚えるべく猶鉢須が中あかきし河曲も
あらしろりやかされしけれ物して秋の情をそへし
　ある月や網のあかきても　追鯨
ある月の追鯨とらふ物は清き網に掛さてまり
かんにも落かし風情の動ける所は自ら知らるる
情るのなからんかし
　綾枕の花も書に曇る卯月哉　野径
わが深時々たり物の参差に目あふひ花て　続乃同

之深く心をとめて洒落堂か初ものの根をとむらし
覚え侍るを発句ハすくなき所なし

住吉姥神遥

松原や袖も霞のまくらん　之道（大坂）
唐風か月の浦のなきや今横　游力
嬉しさの報ひ下や桐の花　荊口（ミノ）
板ふみや秋のかゝるの行くさ　落梧（セヽ）
箏にあはひぬられる板ちらき　探志
艸刈のすゝハ一挑野きくかな　不玉（羽州）
菫薊をさく迄比やもしくれ　露川

かんこ鳥啼や蛙の同り時　珎碩
出女やすゝしき時を木履　仝
春の気や雛に似たる人来る　乙州
河叟小国日和さら〳〵此の手わらん
八重葎一しほ見しりの月　呂丸（羽黒）
言ハぬ名も抱れ柳くし根し　千那
夕立や川おひあく深孫馬　正秀
園栗やうきもたてに雨霜　仝
行秋の四五日くりまれ薄かな　丈艸
木曽子様帰もし　七

市中庭と背あはせなり夜寒かな　イセ　又玄

鶏頭や論しつゝさの所もまき　楚江

京菊や茶をのまん床の上　知月

振りし菓あり月や道の露　ミノ　園如

梯梯や左右に揺めぐるひと　ハ　夕可

むさしの追善

竹葉の名をいつと蝉の声　日　均水

一の年を固めて遠し利生の花　支考

風呂の小ぶり風雅の志をとゝめし

由河もて秋鶏の扇舞ふるかな　仝

さゝ竹や家のゆふへ　二竜　昌房

稲妻や燃る焼く秋の白山　臥高

笛形にとられて滝のかゞやき　呉角

燈笛や木の雨かぶら　園貢　仝

初秋や篠の葉吹移るさつま紫　木枝

さしそへて結くゝる秋の空　如行

唐雅の葉をたくりに月見かな　保田　成秀

葉牡丹や小屋より出る圃ろ　史邦

ついて来て犬もつくまふ涼しさに　竹戸

蝿の姫くや初秋の朝日影　杜童

山吹や笠に指べき枝のなり　素牛

一時雨行人あらき峠かな　尚白

骨折や闇のさまきを行蛍

あはれ此大風にみえてしもの笑ひて作者も作の

一字にて蛍火一息れ生明とこされらんと略し

素桃や姫様子とし夜の蕊妙る

わる風情は云深くもあまく侍り候て少年より此たる

推ひて口拘く情ありひさるいしやしすを生出

する平句よりかりの人の思ひてすへまきあるなるらん

松がさきに付さる月夜かな

何し寺の小僧ぬりの念誦礼讃も眺めずまでの

風雅にて心ゆかしくむかふ月影の境界をいひ出せる

胸中ことなる知解も見え侍し

附句は付と附まで論ずといへとも松葉のきつさまに

煮めて独蓋といひ如輪の像の頬杖とくさまと

云句は前よしめける前句とゆんとより此句はよろつ

あまし殊さらし句毎に季の前まあるをまると

あめてとゆかれしと未練の季のあきたるに思ひ

侍らんか世に気の附たる附まいふもは侍らむ

走　歎く世をむかし松乃音
　　夜明のたしかに聞ゆる
響　夜明の鐘に山の林に
　　かむ十し何なるふしの秋の風
馨　稲の穂のひの（近）力ありき風
　　安心の袖の縁る林の山
世所住の此前の附来たるは百年の後に至れは人
ありて猶よくしもいかなるや一句れ
さりて能かはかは流しても末葉の海よりありけり
月くまき樵屋を言ひ口をりてこと心をあたらん

かり作りなきと云て始めかて一句のきは海まさら
わかきとて有明とふ路ありて作りきてらのたのしく
いかにもまへきりく

麦わらの家してやらん　丹城　知月
越しきへんより簾や　安土の雪　同

大津の禅尼ハ千子之列に東武の何を送れるとかや
人の親の情ハ係ハ浅く深きハ始めありと
あつれむ不思議にして次いて子とはしもりの義方と
世の人その者の子をとらつ来時と因果の昼婚に
之を知をむつかしらと覚えし其人他家よりお嫁

とけ和手し子の起居にいくつりせ給ひてこそあれ
あやしかりけん椛をとて　如乃気いてあらぬ人なし
世にそそ許らあすとたくひつき　己百
かる深き所に引きしくと酒る手地わあう林に
流る甚人て副くて庭の丸らや名の月とゐる
下まてあそひらん
歌數　此下堂またつ　哉をしに
その曲水亭にて夜をとといふる題の発るしきるを
大和国に酒の構よ謌⊙の此時かきわすし
郁の方は者妻路に少なるとて人々のりてそそ

いるくさかりのたこひい時日半にて限なきすし　いれも
阿叟の名宅をやりかきれしは全く家な撰集
よきつきとは顔かにあらしきを
白椛中宅も落ちき　あり乃色　椛隣
桃椛は火のそへ加て梅と白椛に和る深くみちらかくて
久しく薪水の労をとあすけて時日に入　後のこすと
阿叟ともそきにあつりかきれしし
時日を流すて年もれ　流かるん
名月や池をめくりて夜もすから
此を書る文なれ素堂か身の年とまれかくて聞と

せき屋は芭蕉庵此月に似へし風雅は一句の志らへ
はる不風流なへしなとく心を害さへくよて詞を様る
つゝきいつまやはなとんらと月は弱と謗らて済すく
手顔りあるまや今せんへけるをはらぬす絶すて
姿のくさけなきを一句は之僊法かはきとしらぬあまほし

かり寝やん味方の衆のあらき花　史邦

馬上に鞭を揚て吟まる人あり今此無きはあきらかに侍る
しらを味方の衆を顧り行せんといひ惠れ此郎の風流なる
きや阿呆ともあしらへすてゆるされ右右十はこけらの
かまれつくを深く武具の根にあきらかなりやかの所に名を

とめりん艸のゆかりなく実秋の日向にはあはれし

木枯の地まて落さぬ時雨哉　去来

尾の荷兮か木枯や二日の月の吹ちるかと侍る
今此時雨は落つりらんかとて自恥かしまれしと
阿呆のいさゝか有て絶て二日の月につとめられく
時雨を古今に実せられし姿ならんされとといへる
又其未練の叮嚀なれと只地まて落さぬを
つまりしつ思ひゆるされ侍りしとかや

あらしも何の山越の滝　去来

此句も兩年もくやみ風へしや阿呆もかまれ侍りし

しかるに四七斗ばかりあらんとなりつゝき君子
あはれや吁(アヽ)
風雅は業をまなびしもあまた様々万がなかにも唯順風
聖人の精よりのものと作られしも天地の我をさとまし
られそ但鄭衛の楽音なりしとかなしみを何と伝ら
いましめかれはきまつまい
よきくは此風雅の道を作られんとはかりしきものとのれが
いとの他のほかもあらはぬたるにいふらむすべし況や自作
ぬる事は総べんよ聊か若き中よ能不見えて文あるもあ
縁をはかりのあるしまずしのくさきてされども自賛侍る

ありしは昔びいきてこそ舞ふところは勿論いふ所に
志のあらんとも拵はよりつくんせら論き
まりぬ唐土人との余情も句に此所を評し月を見
庭を様をも盛ずいふにあきたりまきや人甚佐にあり
ましえかとそのまゝ和きも付きも面白きや猶も
必ずあくれよと古風の老子も申され侍りしとかたる
風雅の上のこころ限りなし
今の人は所謂風月の情をそむきて唱言の世なれ
素言(ソラゴト)は笑ひつゝをあまたの人の名をさへ聊か
くはを申さんと思ふは諸の面を立たるに古人への

交り深かりし終ふ美食の外以ゝ外なし
尋常此消息ふも妓亭舞女の隠語と嘲る
されど已に讀あやまりてあまたあるか
なくま不まありありけり
風雅ここの階梯あれど修業の理にたがふ輩すくなく
人物の情に違ひぬれど已に風雅を嬉しくて
世の利要にまよひてしるすものは箇中の論も
あつめしわけ多口此を非なりて阿曳いつまでも
いきまれしくて君があるまじくは音にひとりつゝ
せられて阿鼻の口業をはなつまんと旅圖司之

凋柏堂西絶筆
元禄壬申五月十五日

東行餞別

此ごろ海推せよ右は五器一具　をせ哉
昔より以敗おくふことのは君子の人のまめかさる家
ありとかくやとうかんとするさまをすゝむせよかし
いつくしきへ婦しく笑ひける者ありさらずけ別れ
いかにやたへ推していて十歳あまりも古るの関
の名をえ流るゝかゝめやら

もゝちどりゆがミて好まん花の陰　支考
白河の関にみえていふの名残り　其角
行方を我眼にあり春の江　桃隣
歌まくら奥羽の名を聞て黒坂にも
行脚すゝまよし少くれぬぞ　雪站
年経ても味とまられ
黒坂法吉

此書ハもと文孫撰れ梓行ありしを一本を
秘蔵せけるにいつの月乃春大災の為よ
焼失を失ひぬ手に得時しく書肆乃為よ
ひろくいへども焼板やしくありてあゆる力
あし今桃丘店乃乞により浅香氏（青山一ヶ場先大坂之衛士代四郎）
乃古写本を得て深く室しもとて写書を
とりてくさを写ねまゐらせ魚魯のあやまり
観しくかえをあらためるも教くあれハ他日
黒羽をとりて挨拶とあるつけるの事成
文政三年庚辰九月　しるす

かりしの道に
桃葉庵
蓁々

文禄三年 四九十六